

本との出会いを楽しむ 第10回

弘前を発信するための2冊

地域社会研究科教授 檜 貢



今の私にとって、自宅の部屋で手の届くところになくはない本があります。その1冊は「津軽ひろさき歴史文化観光検定公式テキスト」(2008年1月)であり、もう1つは「津軽ひろさき・おべさま年表」(2009年9月)です。いずれの本も津軽ひろさき検定実行委員会が編集し弘前観光コンベンション協会の発行したものです。この2つは弘前の「地域検定」試験を受ける人のために編集されたようですが、検定試験を受けるつもりのない私にとっても弘前を表現するための大事な2冊なのです。その理由は、これらの本は私が日常生活を中心とする弘前を読むための「弘前読本」だからです。別の言い方をすれば、400年以上の年月を積み重ねた弘前というまちに外から来た者が分け入るための水先案内をしてくれる本だということなのです。

私は弘前に住むようになって、7年近くになります。基地のまちの佐世保で子ども時代を過ごし、40歳代の後半まで東京で生活していました。その後、仕事の関係で甲府、宇都宮に住み今では弘前で生活を営んでいます。小さな畑のある市内の一軒家に住み大学に通っています。そんな生活、とりわけコンパクトな城下町の生活が私にはとてもおもしろいのです。2007年8月16日からブログを始めました。1日1記事を書くことを私の生活習慣としています。書き初めて7日目の8月22日の1日だけをなぜだか休載し、それ以外の日々は、弘前に住んで毎日感じたことを愚直に書き続けているのです。この作業はすでに1920日1920記事を超えています。つまり、5年3ヶ月以上、私は毎日ブログを書き続けているのです。これだけ長い期間ですから、弘前を離れた時もありますし、体調を壊すこともありました。それでも何とか1日1記事のブログ生活を続けています。その記事の大半は弘前のことなのです。弘前に拠点を置く生活を軸に書いています。鋭く変化する四季、

われわれを見下ろす岩木山、都市のセントラルパークの弘前城、ぶきっちょな町並み、誇らしげに咲く桜、祭礼の日常性を教えるヨミヤ、都市文化のねふた、秋のもみじ、降雪と雪国の暮らし、津軽の言葉、食べもの、風習、文化。私の耳目から入るもの、体で感じるもの。それらを何でも書いているのです。いい年齢になっていますので、書き残さないと忘れてしまうという心配もありました。感じたままにブログに書く。私なりのブログ文調をつくり出し、毎回900字前後で書いています。そのための時間としては1日40分程度をかけています。

その際に、弘前を読みとる道具がこの2冊の本なのです。私の体から入り込む弘前のことを加工し発信する際の事典・辞書としての役目を担わしているのです。繰り返されている弘前の春、夏、秋、冬のこと。弘前の歴史と文化のこと。先人の偉業のこと。たくさんの図表と写真を使った弘前の原風景。この2冊の本はこれでもか、これでもかと弘前のことを表現しています。私が弘前のまちで感じていることなんて、表面的でしかないのだと言いたげです。弘前のまちは奥深い。だから、この2冊は弘前で生活している限り、手の届くところになければならないのです。



(左：津軽ひろさきおべさま年表)

(右：津軽ひろさき検定)

私は弘前に生活してその体験をブログで発信するつもりでした。それを5年以上も続けているうちに、生活体験と発信の関係が逆転してしまいました。最初の頃は生活体験を発信することでした。ところが、それが毎日の発信ということになると、そのために、弘前で生活体験を求めるようになってしまっています。ブログを書くために、弘

前のまちを歩くということが多くなっているのです。だから、この2冊の本が必要になりました。私の生活の一部に組み込んでいます。学ぶ本、楽しむ本もあれば、この2冊の本のように私の生活体験の発信をサポートしている本もあります。私のブログ発信の生活習慣はこれからも続けます。その座右の銘こそこの2冊なのです。

(ひまき みつぐ)

檜先生が紹介された、「津軽ひろさきおべさま年表、津軽ひろさき検定」は本館で所蔵しています。

所 在: 本館2階開架書架 他

請求記号: 212.2/Ts36

図書館に関する話題 第10回

国際社会関係に関する図書について

人文学部教授 カーペンター ヴィクター リー

「先生、図書館の国際関係論の棚が空っぽです。スカスカになった棚に、何冊かの本が立たずに寝てしまっています…。利用できる本がまったくありません。今、見に行ってください。」

ゼミ生から、そう言われて、図書館本館 2F、国際政治学などが開架配置されている本棚の前に立った。目の前の棚には、2、3冊の本が転がっているだけだった。

特に期末試験前の時期になると、この傾向はますますひどくなり、受講生から口々に「図書がすべて借り出されていて、参考文献として読もうと思ったときに借りることができない」という声が聞かれた。試験問題が事前に示されると、それに関連する図書が、その講義の後すぐに棚からすべて姿を消す…。『都市伝説』のような話だが、脚色なしの事実であった。ある受講生からは、「国際関係論図書館資料充実についてのお願い」が担当教員に対して文書で出されたほどだった。これは今から8年前、2004年のことである。

2001年から、本学でも、私と新任の同僚教員によって、国際政治学・国際協力論・国際平和論な

どの国際関係系科目が充実して開講されるようになった。開講前の下調べで、弘前大学附属図書館本館では、国際政治・国際関係論分野を研究する上で必須の基礎的文献・理論書が十分には所蔵されていないことが判明した。かつ、時事的な国際問題を扱う最新の専門書も満足に網羅されているとは言い難い状況であった。インターネット環境が今ほど整備されていない当時、受講者数が多い、21世紀教育科目「政治学の基礎」、人文学部専門科目「国際政治A・B」「国際協力論A・B・C」の国際関係論科目の関係図書はヘビーローテーションを余儀なくされた。

そのような声が出る前から、われわれ担当教員も、機会を見つけては研究費を使って図書館に国際関係論専門書を開架配置してきた。また、人文学部学部長の理解を得て、裁量経費の中から毎年、少しずつ、テーマを厳密に検討し作成したリストに基づき必須文献を揃える努力を続けてきた。それでも、まだ、はじめの学生の声のように、十分とは言い難い。